

P10

上顎正中部埋伏過剰歯摘出後の前歯部歯列の変化について

○中尾哲之, 麻生郁子
(なかお小児歯科)

【目的】小児の埋伏過剰歯の出現頻度は、2～3%と報告されている。上顎正中部埋伏過剰歯により切歯部に歯列不正や咬合異常を来すことがある。その内容は、正中離開、切歯の捻転、転位等である。これらの予防や改善のため、埋伏過剰歯を摘出する必要があると考える。摘出時期は、本院の場合、大半のケースで5～6歳にかけて行っている。これは上顎永久前歯の萌出を阻害している埋伏過剰歯を早期に摘出して、永久前歯が可及的に正常に萌出するよう望むからである。今回この埋伏過剰歯を早期に摘出することにより、その後、実際に永久前歯の歯列咬合がどのような状態になるのかを調べ摘出時期等を検討することにある。

【対象と方法】2000年6月～2010年6月の新患1748名中、上顎正中部埋伏過剰歯を保有していたのは、47名(2.7%)であった。対象はその内で埋伏過剰歯の40歯を摘出することが出来た34名である。

摘出時は、咬合型エックス線で過剰歯と永久切歯との前後的位置関係を、パノラマ法で上下関係を調べ、永久歯の損傷を招かないよう注意した。上記の方法でも不明な場合は、C.T.も併用して位置関係を診査した。摘出後は、定期健診時にデンタルエックス線と視診にて歯列の変化等を診査した。

【結果】埋伏過剰歯の摘出時期は、5歳0ヵ月から10歳9ヵ月に亘り、平均6歳2ヵ月であったが、6歳以下は31名の91.2%であった。埋伏過剰歯と永久切歯の上下的位置関係は下記の通りである。

中切歯の切縁側	1/3	8例
中切歯の歯冠中央	1/3	10例
中切歯の歯冠歯頸側	1/3	7例

中切歯の歯根歯頸側	1/3	6例
中切歯の歯根中央	1/3	0例
中切歯の歯根根尖側	1/3	3例

埋伏過剰歯を摘出した後、上顎前歯部の歯列の変化を見ることが出来たのは、30例であった。その内容は、以下の通りであった。

1. 切歯に異常なし	3例(10.0%)
2. 正中離開はそのまま	4例(13.3%)
3. 正中離開が改善	21例(70.0%)
4. 中切歯の捻転と正中離開が改善	2例(6.7%)

【考察】埋伏過剰歯を摘出した年齢は、6歳以下が大半であった。過剰歯は殆ど早期には上下的に中切歯の歯冠部に存在しており、術技により中切歯を傷害する恐れは少なかったと考えられる。術後の経過を見ることが出来た30例では、もともと異常の無かった3例を除いた27例中23例に正中離開、捻転の異常が改善していた。正中離開の改善には、上唇小帯、側切歯の存在等も関与するので、その改善が一概に過剰歯の摘出のためだとはいえない。しかし、早期に埋伏過剰歯を摘出することが好結果を生むことが示唆された。摘出年齢は、過剰歯が順生であっても中切歯の歯冠部に位置している5～6歳が望ましいと推察された。

【文献】

- 野田忠他：上顎前歯部過剰歯の経年的観察，小児歯誌，7：152～160，1969
- 鈴木信夫他：上顎前歯部過剰歯と不正咬合の関連，日矯歯誌 31：144～154，1972
- 野坂久美子他：上顎正中埋伏過剰歯の中切歯歯根形成への影響，小児歯誌 18：502～512，1980
- 石川雅章他：上顎前歯部に過剰歯を有する症例に対する三次元的研究，小児歯誌 22：631～641，1984